

# 創大中国論集

## 第19号

マカオ・コレジオ所蔵の日本語学習書籍に

関する一考察…………… 高橋 強(1)

創価大学文学部人間学科中国語・中国社会文化専修

2016年3月



---

# 創大中国論集

---

第 19 号

創価大学文学部人間学科中国語・中国社会文化専修

2016 年 3 月



# マカオ・コレジオ所蔵の 日本語学習書籍に関する一考察

高橋 強

序

1. マカオ・コレジオ所蔵書
2. 「きりしたん版」と日本語学習書籍
3. 宣教師と日本での日本語学習
4. マカオ・コレジオと日本語の授業
5. 結び

序

1594年創建のマカオ・コレジオは極東でのキリスト教布教を目的として、多くの司祭を養成し、また多くの宣教師の育成にあたった。巡察師アレシャンドロ・ヴァリニャーノによって創建されたのであるが、その当初の主たる目的は日本人司祭の養成にあったと言われる。彼らは習得が難しいラテン語を使いながら、勉学に励んでいたのであろう。コレジオには図書室があり、彼らも利用したであろうことは想像に難くない。

その図書室にはどのような書籍が所蔵されていたのであろうか。1616年のコレジオ所蔵目録に拠ると、43種類の書籍が所蔵されていた。<sup>(1)</sup>そしてその中に、日本語学習関係の書籍があったことが判明している。それは『日

葡辞書』、『日本大文典』、『舞の本』の3種類である。日本人イルマンにも役立つと考えられるが、主にはヨーロッパ人宣教師の為であったのであろう。

この3種類のうち前者2種類は所謂「きりしたん版」である。「きりしたん版」とは、ヴェリニャーノによって日本に運び込まれた活字印刷機によって印刷された日本人に対するキリスト教布教の為の書籍である。従って前者2種類は、ヨーロッパ人宣教師の為であったと考えたほうが自然であろう。

本稿の目的は、上記日本語学習書籍はどのような内容だったのか、またヨーロッパ人宣教師にとっていかなる存在であったのか、更にはどのような経緯で所蔵されるに至ったのか等を明らかにすることである。

## 1. マカオ・コレジオ所蔵書

マカオ・コレジオは1594年に創建され、以後、イエズス会の極東での布教の中心地となっていた。イエズス会は1762年ポルトガル政府の命令によりマカオを追放されたが、コレジオ所蔵書はそのままコレジオに保管された。しかし1835年1月25日、コレジオおよび隣接の教会の火災により、すべて焼失してしまった。従って、コレジオ所蔵書そのものは残っていない。現在ではあまり完全ではない目録が伝存するだけである。しかしコレジオには図書室もあったので、そこに如何なる書籍があったかを推測する貴重な資料である。

当時、マカオに存在した蔵書目録としては、2点知られている。1616年の目録および1633年の目録である。その内、マカオ・コレジオ所蔵書と言えるのは前者で、後者は1633年10月28日にマカオで死亡した日本司祭ディオゴ・ヴァレンテの遺品目録の記録の一部である。<sup>(2)</sup>

以下、1616年の書目を紹介する（書名といっても簡略な表記のみで、中には著者名のみが表記されている場合もあった）。<sup>(3)</sup>

- (1) ファン・デ・サレス (João da Salas) 著者名。1 部
- (2) アントニオ・フェイオ (Antonio Feo) 著者名。1 部
- (3) ファン・マルドナド (Maldonato) 著者名。1 部
- (4) ファン・デ・トーレス (João de Torres) 著者名。1 部
- (5) 『ヴィルギリウス注解』 1 部
- (6) 『スペイン語によるキリスト伝』 2 部
- (7) 『モリナ著正当性について』 1 部
- (8) 『日本大文典』 1 部
- (9) 『ヨシュア記注解』 1 部
- (10) 『日葡辞書』 1 部
- (11) 『パードレ・フォンセカ注解』 2 部
- (12) 『ナバロの手引き書』 1 部
- (13) 『ローマ殉教者列伝』 1 部
- (14) 『ボストンの経』 2 部
- (15) 『舞の本』 1 部
- (16) 『信仰生活』 6 部
- (17) 『パードレ・ガスパル・バルレリ伝』 6 部
- (18) 『キリストの受難の黙想』 2 部
- (19) 『ポルトガル語による初級教本』 6 部
- (20) 『ポルトガル語によるイエズス会規則』 1 部
- (21) 『ラテン語によるイエズス会規則』 1 部
- (22) 『聖パードレ・イグナティウス伝』 スペイン語版 2 部、ラテン語版 3 部
- (23) 『ラテン語による殉教者ゴンサロ・ダ・シルヴェイラ伝』 3 部
- (24) 『黙想の手引き書』 1 部
- (25) 『トリエント公会議』 1 部
- (26) 『スペイン語による聖アウグスチヌスの黙想』 1 部

- (27) 『聖教精華』 3部
- (28) 『十字軍の解説』 1部
- (29) 『イエズス会会憲』 1部
- (30) 『ナバロ要約』 53部
- (31) 『イエズス会の基本精神および特典 小冊子四部』 4部
- (32) 『パードレ・ロポ・デ・アブレウのスンマ』 1部
- (33) 『パードレ・ペドロ・ゴメスの要綱』 1部
- (34) 『聖書』 1部
- (35) 『聖務日課書』 1部
- (36) 『聖アウグスチヌスの講解』 1部
- (37) *Sylva locorum* (書名が特定できない) 1部
- (38) 『精神修養の提要』 1部
- (39) 『イエズス会歴代総長の命令と基本精神』 1部
- (40) 『巡察師パードレのカテギズモ』 8部
- (41) ボニファチオ (Bonifacios) 著者名。11部
- (42) 『キケロ書簡集』 5部
- (43) 『聖書格言第二部』 (部数の記載なし)

以上の書目はある「史料」によるもので、コレジオ内の日本イエズス会プロクラドル事務所に置いてある書籍の一覧である。同史料の後書きによると、日本から送られてきた書籍は管区長が自室に保管したそうである。なお管区長室には、コレジオの文庫から抜き出して、管区長が自室に置いていた書籍もあったという。コレジオには図書室があったので、当時、コレジオにあった書籍は、図書室、管区長室、プロクラドル事務所の3箇所に配置されていたことになる。<sup>(4)</sup>

以上の書目から、日本語学習関係の書籍は『日葡辞書』(1部)、『日本大

文典』（1部）、『舞の本』（1部）の3種類が存在していたことがわかる。なお『日葡辞書』は1603年から1604年にかけて長崎で印刷されたもの、『日本大文典』は1604年から1608年にかけて長崎で印刷されたもので、いわゆる「きりしたん版」であった。日本語学習関係ではないが『聖教精華』（3部）は1610年に長崎で印刷された、また『精神修養の提要』（1部）は1596年に天草で印刷された「きりしたん版」である。『聖教精華』、『精神修養の提要』はラテン語で書かれているので、日本語を学習していないヨーロッパ人宣教師にも、大いに役立ったものと考えられる。<sup>(5)</sup> なおラテン語で書かれたものには上記以外にも『ナバロの告解提要』、『金言集』等もあったので、所蔵された可能性は少なくない。日本で印刷された「きりしたん版」の影響力は小さくない。

1616年当時、後に日本人イエズス会司祭になるコンスタンティノ・トラウド、伊予メルシオル、町田マティアス、飾屋ジュスト、斉藤パウロ、西ロマン等が同コレジオに滞在或いは学んでいた。<sup>(6)</sup> 上記「きりしたん版」に触れる機会があったか否かは不明であるが、触れていれば学習効果が大いに期待されたと考えられる。

## 2. 「きりしたん版」と日本語学習書籍

1590年巡察師ヴァリニャーノが来日し（計3回来日している。第1回目は1579年、第3回目は1598年）、8月に加津佐で第二回協議会が開催された。その際、諮問第12において、ヨーロッパ人宣教師の日本語の上達と、日本人のラテン語上達のための方法が検討された。そこでは完成度が高くてよく整理された日本語辞典を早急に作成すること、また日本語・ラテン語辞典と日本文典を編纂し印刷すること、すでに翻訳を終えていた数冊の書籍の印刷などについて結論を出し、ヴァリニャーノがこれを認めた。<sup>(7)</sup>

ヴァリニャーノは1579年に初めて来日した際に、ヨーロッパ人宣教師が

日本語に習熟していない事実を知って、日本語の習得が喫緊の課題であることを認識していた。<sup>(8)</sup> 従って1590年に来日した際には、活字印刷機をヨーロッパから（ゴアやマカオでも同印刷機を使ってすでに印刷を行っている）携帯した上で、前述の結論を出した。活字印刷機は加津佐コレジオに設置されて開版の準備が始まった。その後、コレジオは天草（1591年）、長崎（1598年）に移転していくが、移転先々で印刷は行われていった。なお印刷機の導入の第一の目的は、日本で日本人向けの教理書を作成し、疑念を引き起こすような異説や異端的な考え方を排除するためであった。<sup>(9)</sup> 一方このような金属活字による多量の印刷出版は、庶民層への布教にも大きな役割を果たした。

活字印刷機によって印刷された出版物は、1590年から1614年までに50種とも100種とも言われ、うち32種74本が現存する。言語面から見ると、ローマ字体を含む邦文本20種、ラテン語本5種（『靈操』、『精神修養の提要』、『ナバロの告解提要』、『金言集』、『聖教精華』）、辞典類3種（『羅葡日辞書』、『日葡辞書』、『落葉集』）、邦文断簡4種となる。内容面から分類すると、教理書、祈祷書、典礼書、信心書、修養書、語学書（文典）、辞典、文学書からなる。<sup>(10)</sup>

「きりしたん版」の中には、『平家物語』、『イソポのハブラス』、『金句集』など内外のイルマンの為の深い教養と、東西文化の比較に大きな役割を果たしたものもある。<sup>(11)</sup> この三冊は1592、93年に天草で出版された三冊合綴本で、宣教師の日本語学習の為の教科書ともいわれる。それぞれの目的は次に示すとおりである。即ち「この一冊は、先ず最初に当時日本の主要な歴史書と見られた平家物語を4巻に要約し、対話体に改めて口語訳し、話し言葉の規準を示した。次に伊曾保物語の口語訳本により、説教の際に利用できる例話を提供するとともに、日本語表現の多様性を具体的に教え、更に僧侶などの好んで用いた漢文出自の金言名句に口語注を添えた金句集を加えることによって、宣教師の言葉遣いに深さを増す資料とした」と。<sup>(12)</sup>

ヨーロッパ人宣教師の為に、日本語学習関係の書籍の編纂事業は1580年

代初頭に始まっていた。従って、文典と辞書の編纂と印刷は、宣教師たちの日本語学習に弾みを与え、また日本人イルマンのラテン語学習にも便宜を与えた。まず1595年に天草で羅葡日対訳辞書『羅葡日辞書』が出版された。これは当時ヨーロッパで盛行していたカレピーノのラテン語辞書を基礎として、それに豊富な日本語対訳を添えたものである。この辞書は印刷に8ヶ月間を要したが、スペイン人ゴメスによれば、同国人のスペイン語学の第一人者ネブリハのものにも劣らない質の高いものであった。この辞書はまた、説教のための辞書とも言われた。ヨーロッパ人司祭は説教に当たって、まず古典を参照しながらラテン語で原稿を作り、それを日本人イルマンなどの協力のもとに日本語に訳した。その際に利用されたのがこの辞書であり、そのために卑語も方言も含まれず、使用の日本語は文語であった。なお同年には、アノエル・アルヴァレス著『ラテン文典』に日本語の活用を併せ解説した日本語版が天草で出版されている。<sup>(13)</sup>

当時司祭の要務は、告解を聴くこと（聴罪）と説教であった。そのため、司祭にはあらゆる種類の日本語に広範に精通することが求められた。それに応えるために、日本語・ポルトガル語辞典の出版が急がれた。1590年代の終わりに辞書の編纂が始まり、1603年に『日葡辞書』が、翌年には「補遺」が続いて印刷された。これは、キリシタン宣教師による日本語研究の一つの頂点と評価されている。<sup>(14)</sup>

イエズス会による布教は1590年代後半から1610年代にその頂点を迎えた。1600年前後、イエズス会宣教師指導下のキリスト教徒は30万人にも達した。日本で働くイエズス会士も多いときには約140名を数えた。従って『日葡辞書』はまさに布教の頂点に達していた頃に印刷されたということになり、その影響力は計り知れないものがあつた。

## 2-1. 『日葡辞書』

『日葡辞書』は1603年から1604年にかけて、長崎コレジオで印刷され、用語は日本語とポルトガル語で、書体はローマ字であった。同辞書は1595年天草で印刷された『羅葡日辞書』をもとに作成されたもので、『日葡辞書』序言の中に次のようにある。「今日は、キリスト教に対する迫害がひどくて、パードレや日本人イルマンたちは以前よりも若干の時間的余裕が生じたので、年来不完全ながら存していたこれらの辞書（1595年天草版羅葡日対訳辞書など）を見直し、一層よく検討することができるようになった。そこでわれわれは、日本語をよく知っている者のうち何人かが、日本語に精通している数人の日本人の援助を得て、この辞書を検討増補して完成するために、数年の間精励して事に当たるようにしたのである」と。<sup>(15)</sup>

『日葡辞書』の冒頭の全頁には、「イエズス会のパードレたち及びイルマンたちによって編纂され、ポルトガル語の説明を付したる 日本語辞書 教区司教ならびに上長たちの許可のもとに、日本イエズス会の長崎コレジオにおいて 1603年」と書かれている。<sup>(16)</sup> まさに多くのパードレ、イルマンたちの長年の研鑽の集大成であった。

本篇と補遺をあわせた丁数は402（804頁）、見出し語は、本篇25967語、補遺6831語である。両者の重複を除けば総数は32293語に達する。動詞の標出には『羅葡日辞書』の様式に準じて、語根、現在形、過去形を連記し、また『日葡辞書』は話し言葉を主体とするが故に、口語の活用に基づいていた。同辞書では、類義語や異義語・対義語を並列している。<sup>(17)</sup>

当時、日本では近畿に対して九州と関東は、著しい方言差を有する地方として知られていた。従って、九州地方を布教の中心としてきたイエズス会は、これらの地方の言葉に重大な関心を持ち、近畿方言をCami（上）、九州方言をX.Ximo（下）と標して取り扱い、上（ミヤコ・都）に対比させた九州方言について指摘している。方言注記のあるものは465語、その大部分は下

地方の語が占める。その6割以上は名詞で、動詞は約100語である。<sup>(18)</sup>

卑語については、B (Baixa 下品な) などで注記し、卑語な語であることを明示した例は約90である。方言や卑語は言語の性格に基づいて宣教師の使うべきでない言葉とされた。また宣教師の立場から避けるべき特殊語の一つは、女性語 (Palaura de molheres) で、約110語に注記がある。その多くは女房詞と呼ばれるものである。仏法語については、当時仏教はキリスト教と対立関係にあったので、慎重に対処している。明確な仏教用語については採らない方針であったが、一般に通用している仏法語 Bup. (Buppô) と注記して約150語取り上げている。その他に、文書語主として漢語、また詩歌語主として和語などの注記がなされている。<sup>(19)</sup>

### 『舞の本』

『舞の本』は「きりしたん版」かどうか不明であるが、『日葡辞書』や後述のロドリゲス著『日本大文典』（1604年～1608年）の中で数多く引用されているので、その関連においてここで考察する。前者においては注記したものの70例、しないもの40例以上で、そのすべてが口語体の例である。後述するロドリゲス著『日本小文典』（1620年）によると、ローマ字で印刷された口語の舞 (May de pratica) が存在しており、さらにバレット写本 (1591年) にある“舞の何丁を見よ”との注がローマ字版本を指しているとなれば、同写本以前に刊行されていたことになる。<sup>(20)</sup>

さらに本書については、バレット写本から当時存在していたことは推測できるが、今日伝存していないので、幸若舞などの日本古来の舞の詞の集大成か、或いはキリシタン新作の宗教的な舞かと言う点で、研究者の間で見解が分かれている。柘源一氏は、バレット写本中の「舞の参照」の注記は、その本文内容の比喩なる話を日本の「舞」に求めたものであることを明らかにし、さらに『日本大文典』には200近い「舞」の例文を挙げているにもかかわらず、

キリシタン創作の「舞」と認められる文例がないことを指摘し、前者の立場にたっている。<sup>(21)</sup> なお後者の立場、即ちキリシタン新作の宗教的な舞に関して言うと、当時、聖書の教えを劇に仕立てて演じていたようなので、新作の舞いの存在も十分に考えられる。<sup>(22)</sup>

本書の刊本からは、イエズス会の日本研究は相当深いということが分かる。さらにこれは、宣教師の日本語習得目標や、宣教師と日本の上流階級との対話に備えていたことと関係があると考えられる。

## 2-2. 『日本大文典』

『日本大文典』は1604年から1608年にかけて長崎コレジオで印刷され、用語は日本語とポルトガル語で、書体はローマ字であった。『日葡辞書』(1603年～1604年長崎印刷)と同時に企画され、それぞれ分けて編集が開始されたとも言われている。<sup>(23)</sup>

同文典はジョアン・ロドリゲスによって編纂されたもので、三巻印刷された。第一巻は動詞など屈折論、品詞論、第二巻は文章論、修辞論、第三巻は文体論、人名論、計数論等である。アルヴァレス著『ラテン文典』(1595年印刷)を規準とし、文法的範疇や文法の基本的概念についてはアルヴァレスの学説用語を遵守しながら、文法現象はあくまでも日本語の事実を尊重する態度を堅持し、ラテン的と日本的との二元的立場に立ったものである。ロドリゲスはラテン語の文法的範疇では処置しがたい事象があることを認めて、その文法的事実を日本語の「表現法、言い方」と呼んで随所にその具体例を挙げて示した。また、彼は日本語の系統的分類に及んで、固有語を「よみ」、字音語を「こえ」と呼び分けている。<sup>(24)</sup>

他方ロドリゲスは、敬語や人名に付する尊称、呼称が非常に発達していること、特殊な接続法のあることなどを述べて、言語的優秀性も示している。<sup>(25)</sup> なお敬語に関しては、敬語を、相手や話題の人物の身分の高下に応じた語の

使い分けによる尊敬、丁寧の表現であるととらえ、さらに敬語表現と対蹠的な見下げや軽蔑表現についても言及している。彼が待遇表現を重視していることがわかる。彼がもう一つ重視していたのは、書状における書き言葉である。同文典のなかで「書状に於ける書き言葉の文体は、簡潔という点においても、又助詞や成語の特有なものがある事に於いても、他の書き言葉とは大いに違っている」と指摘している。厳格な身分制、面子や儀礼を重んじる社会では、古文書の書き方、読み方は、一段高い言語能力として評価されていると考えていたからであろう。<sup>(26)</sup>

同文典は、単なる文法書ではないと評価される。それは、本来の言語学的な価値以外に、「標準語と方言の発音法」、「話し言葉と書き言葉」、「書状の礼法」、「人名論」、「数詞の用法」、「計数論」（主として第三卷）といった、日本語の極めて多方面にわたる有益な情報が含まれているからである。当時、日本の首都であった京都で話されていた標準語と、布教活動の中心地九州の方言の間には、著しい相違があり、この事実を重要視したロドリゲスは、数章をこの問題に充てた。宣教師たちが、京都の公家の言葉も、九州の一般庶民の言葉も理解できるようにとの配慮である。ロドリゲスはまた、日本の詩歌の概説をしたり、『平家物語』（90例）、『イソップ物語』（40例）、『論語』（40例）を引用したり、さらには日本の地理と歴史に関する数章も収めている。<sup>(27)</sup>

### 3. 宣教師と日本での日本語学習

日本に赴く多くの宣教師は、日本語の学習の必要性を感じていた。次のパードレ・メストレ・ベルシオール・ヌネスの書簡（1554年12月3日）にそれが現れている。即ち「我ら日本に赴く者は言語を解せざるべからず」と。また宣教師の中には日本語学習に励み、その成果をあげている者も現れている。パードレ・メストレ・フランシスコザビエルの書簡（1552年1月29日）には「ジョアン・フェルナンデスはレゴにしてよく日本語を話し、パードレ・

コスモ・トルレスの通訳を勤む」とあり、来日から2年後には、組織の中で通訳としての役割を果たしていた者がいたことがわかる。<sup>(28)</sup>

次の書簡は興味深い。当時の宣教師たちの日本語は完全なものではなかったことがわかる一方で、不十分ながら会話が成り立つまで、日本語学習が進展していたことが読み取れる。パードレ・ガスパル・ビレラの手紙（1557年10月28日）の中に、「今日までは大いに通訳の欠乏を感じしが、今は多少の別あれども我らは皆国語を解したこれを話せり」とある。<sup>(29)</sup>

豊後で活躍していた宣教師の日本語学習の状況からは、かなり積極的に日課の中に日本語学習の時間が設けられていたことがわかる。パードレ・ガスパル・ビレラの手紙（1557年10月29日）には次のようにある。「その他のイルマンたちは言語（日本語）の学習を始めますが、この学習を、私たちは皆、他に妨げとなることがなければ、昼と夜に実践しています。これには昼の10時までの時間が充てられ、同時刻になると食事をします」と。<sup>(30)</sup>

日本語学習の進展については、パードレ・メストレ・ベンシヨール・ヌネスの手紙（1558年1月10日）にも見える。即ち「パードレ・コスモ・デ・トルレスおよび日本人に説教をなす特能を有するイルマン・ジョアン・フェルナンデスは豊後に在り。日本語を知らざればなすこと多からざるがゆえに、我ら到着後住院において日本語を教えることに大いに努力し、パードレ・ガスパル・ビレラおよび同地に留りしイルマン三人はすでに大いに語学に進歩せり」と。何年間日本に滞在していたのかは不明であるが、“大いに語学に進歩せり”の表現は大変に興味深い。また同書簡からは、日本語の教師役は、先に来日し十分な会話ができるようになった者が当たっていたことがわかる。<sup>(31)</sup>

1549年にフランシスコ・ザビエルが来日してから約10年で、早くも日本語を習得した者は、後進への教師役に当たり、更には教義書の翻訳作業にも着手するなど、日本語学習に対する意識は高まり、それと共にレベルも大き

く進展していった。次の書簡、パードレ・コスモ・デ・トルレスの書簡（1560年10月20日）からは布教に使用する書物が、順次日本語に翻訳されている経緯が読み取れる。即ち「尊師が残し置かれたる有益なる書物はすでに日本語に翻訳し、異教徒の間にデウスの教を説くに利用せり」と。<sup>(32)</sup>

日本語学習の進展について総括すると、起源は布教の許可を支配者に得るための交渉によるものと言われている。そのためには教義書の翻訳が不可欠であり、その作業が急がれた。ザビエル来日から約10年で語学の問題は落ち着きを見せ始め、後進への教授や日本語研究への進展が見られ、15年経過した頃には、日本語を学ぶだけでなく、日本人にラテン語を教えるという段階に入った。さらには動詞の活用に着目した文法書や、辞書の編纂へつながっていくのである。<sup>(33)</sup>

イルマン・ルイス・デ・アルメイダの書簡（1564年10月14日）によると、イルマン・ドゥアルテ・ダ・シルヴァが文法研究し日本語の語彙集を編纂している。即ち「(イルマン・ドゥアルテ・ダ・シルヴァが) かつてひと時も怠惰にしているのを見たことがなく、(彼は) 日本の文字のみならず、非常に難解なシナの文字も理解するに至った。日本語の文法術を考案し、甚だ分量の多い(日本)語彙集を編纂した」と。<sup>(34)</sup>

さらにルイス・フロイスの書簡（1564年10月3日）によると、イルマン・ジョアン・フェルナンデスが、6～7ヶ月費やして、日本語の文法書（動詞活用、過去、統語論、その他の必要な規則を記したもの）と日本語及びポルトガル語の語彙集を作成している。当時は、少なくとも数種類の文法や語彙に関する書物が編纂されていたと考えられている。これらより、各地に配置された宣教師それぞれが自分たちなりに、日本語の研究に取り組んでいたことがわかる。ただし各地の宣教師たちが分担して、言葉の研究や、翻訳、語彙集の編纂にあたっていたかどうかは不明である。<sup>(35)</sup>

1560年代に入ると、日本の文化や仏教の教義の研究も盛んになり、僧侶

と会話する者も現れてきている。<sup>(36)</sup> ルイス・フロイスの書簡（1566年9月）には、坂東の大学（現在の足利学校）に通じていると推測される僧侶とのやりとりが記されている。その中に「仏僧は深い学識があることから、彼ら（仏僧に随伴した三名の武士）に対して次のような助言をした。すなわち、宇宙の創造と創造主、また、肉体から離れた後も存在する不滅の物質というような、いとも新奇なことについては、質問によって（話し）を中断させるのではなく、（黙って）最後まで聞いた後、我らが述べたことを日本の諸宗旨と比較して深く吟味するのが良い、と」とある。ここから推察できることは、宣教師によっては日本語の学習とその理解が、単に日常生活に必要な語学だけでなく、教理の核心についても説明できるレベルまで至っていたことである。<sup>(37)</sup>

ベルショール・デ・フィゲイレドの書簡（1566年9月）によると、日本の文字と漢字の学習が記されている。「（修道院で）我らの同僚パウロから、彼ら（日本）の文字と漢字を学んでいる。この教会では、パウロと称する堺出身の身分たる人を同僚とした」と。「会話」あるいは「日本語」という記し方ではなく、「文字と漢字」と記したことから推測すると、文字の学習においては日本人の協力者が不可欠であったと考えられる。なおカナ・漢字を教えられる日本人となれば、ある程度の学識者か、身分のある者、あるいは仏僧等であろう。<sup>(38)</sup>

以上、宣教師の日本語学習の進展状況を概括してきたが、他方、全体的に見るとどのように言うことができるのであろうか。ある研究者は次のように述べる。即ち「1566年当時の状況としては、宣教師のなかで告白の内容を十分に理解できる者は少数派で、全ての活動地域において、宣教師と日本人とのやりとりが円滑に行われていたとは言えず、宣教師たちの日本語の格差は大きかった」と。<sup>(39)</sup>

またある研究者は次のように総括する。即ち「宣教師の日本語理解力は一

一般的に低く『日本語を知らざればなすこと多からざるゆえに、日本語を学ぶことに大いに努力し』『普通勤務の余暇は、日本語の学習と書き方に費やし、住院においては日本語のほか話さず』という状態ながら満足すべきものには至らなかった」と。<sup>(40)</sup>

1579年に来日した巡察師ヴァリニャーノも同様に、ヨーロッパ人宣教師が日本語に習熟していない状況を認識していた。そしてそのような状況を受けて、前述の如く、ヨーロッパ人宣教師の為に、日本語学習関係の書籍の編纂事業が1580年代初期に始まったのである。

なお宣教師の日本語習熟度の問題は、学習者の問題というよりもむしろ日本語習得の困難さの問題であることを指摘する者も多かった。フロイトでさえ1578年10月16日付けの書簡で「この国は語彙が非常に多い上に、儀礼上必要があって知っておくべき助詞が多いために、他の国語のように容易にこれに通じることはできない。イルマンたちのうち数人は、同時に日本の文字の書き方を習った。国語を完全に知るうえで大きな利益があるからである」と述べている。<sup>(41)</sup>

さらに日本イエズス会の元上長カブラルは、1595年11月23日の書簡で、日本語習得の難しさを次のように指摘する。“文法を学び、また学習することによって、それほど容易に（キリスト教を）教えられると思っているのは、日本語を知らないからである。なぜなら、才能ある者でも告解を聴けるようになるには6年はかかり、キリスト教徒に説教をすることができるには15年以上を要する。異教徒に対する本来の説教などはまったく考えられないことである”と。<sup>(42)</sup>

#### 4. マカオ・コレジオと日本語の授業

マカオ・コレジオでは1620年当時、日本語の授業が設置されていたことがわかっている。コレジオの1620年「年報」には次のようにある。「巡察師

パードレは日本語のクラスを設けることを命じた。それは今年渡来したパードレたちや、すでに当地にいるその他（のパードレたち）が大いに情熱を傾注して学び、日本から何らかの新たな情報が届き次第、またそれが届かなくても（日本に）渡る方法、確実な船便があれば、その地に着き次第直ちに働くことが出来るよう、そして自由にキリスト教会の世話をすることが出来て、すでにその地について仕事に忙殺されている者たちが、彼らに言語（日本語）を教える時間を費やす必要のないようにするためである」と。<sup>(43)</sup>

前述の年報には、1620年巡察師ジェロニモ・ロドリゲスが、コレジオに新たに日本語の授業を開設するよう命じたこと、そしてそれはヨーロッパ人イエズス会士による日本布教強化策の一環であったことが、明確に記されている。そして巡察師ロドリゲスの指示は、直ぐに実行に移された。1620年9月作成の日本管区第三カタログは、マカオ・コレジオに、日本語と中国語の教師が一人ずついたことを伝えている。<sup>(44)</sup>

マカオ・コレジオは1594年12月に創建されたが、その主たる目的は日本人司祭の養成にあった。1594年以降日本イエズス会では24名の司祭を誕生させたが、その内18名はマカオ・コレジオに学んだ。しかし彼らは司祭養成の為の学習をすべて修了した訳ではなかった。殆どは倫理学を修了するに止まり、哲学課程に進級した者そして最終の神学課程にまで進級した者はごく僅かであった。その要因として、ラテン語という言語習得の困難さもあったが、日本イエズス会を取り巻く環境の厳しさ（特に1614年には徳川幕府はキリスト教禁教令を出し、主たるキリスト教徒をマカオやマニラに追放している）がそうさせたとも考えられる。即ちコレジオで必修の学問を修了していない者も、司祭叙階を受けることが許され、日本での教会活動に投入されていったのである。<sup>(45)</sup>

日本人司祭養成の過程において、前述の如くその教育成果に見るべきものがなくなった頃、コレジオの性格に変化が現れた。コレジオは日本人イルマ

ンの育成の場というよりは、むしろヨーロッパ人宣教師の育成の場になっていった。その性格の変化がはっきり表面化する頃、コレジオに日本語の授業が設置されたのである。<sup>(46)</sup>

マカオ・コレジオに日本語の授業が開設された1620年は、それは丁度ジョアン・ロドリゲスが上長の命を受けて、『日本小文典』をマカオで出版した年でもある。なお『小文典』は日本から運んできた活字印刷機によって印刷されたものであるので、「きりしたん版」と呼んでもいいと考える。『日本大文典』がすでに発刊されているにもかかわらず、『小文典』を著して出版したこともコレジオがその活動の重点を、日本人司祭養成から日本向けのヨーロッパ人宣教師の育成に移したことと無関係ではないであろう。<sup>(47)</sup>

『小文典』は『大文典』と同様に、ヨーロッパ人宣教師が、日本で布教活動をする際に必要な日本語を習得するために著された「実用的な文法書」であり、しかもそれは独習用の文法書ではなく、良き教師の指導のもとで日本語を学ぶための「文法教科書」であった。『小文典』には二つの特色があると言われる。一つは「ラテンの語法」から解放されているということ、もう一つは初級学習者の為に編集されているということである。<sup>(48)</sup>

特に後者について、ロドリゲスは緒言「読者へ」の中で、前著『大文典』では多岐にわたる日本語の規則を示し、混乱の種になる虞もあるので、そこから要点を抽出して簡潔に纏め、初心者にとって『大文典』への手引きとなるものを作る必要があるとかねて考えていたが、この度あらためて上長から命じられてそれが実現した、と述べている。上長の指示は『小文典』発刊に大きな契機を与えたが、やはりそれはコレジオにおける日本語の授業の設置と連動したものである考えられる。<sup>(49)</sup>

初級学習者の為の編集内容は、特に以下の三点において顕著である。①日本語の教授法を提案している、②日本語の例にポルトガル語訳を付けている、③日本概況という一つの章を増やしている点である。①については、日本で

育った日本人について学ぶこと、文法規則を極力応用すること、更には各界の人々と交流すること等と提案している。②については、文法の説明を少なくし、日本語の例の9割に平易なポルトガル語訳を付けている。③については、文体論、計数論を簡略化する代わりに人名論を詳述し、更に官職名、日本全国66の群県名を記述し、最後に日本仏教の概況を付け加えている。<sup>(50)</sup>

1620年に、マカオ・コレジオにおいて初めて開設された日本語の授業であるが、当時いかに重視されていたかがわかる一つの意見書がある。1622年9月6日付け日本管区顧問の総長補佐宛て意見書に、次のように記されている。「ここで私はいくつかの事柄を取り上げようと思う。第一に、このコレジオに日本語の授業が設置されていることについてである。私と顧問は管区の名で尊師に対し、この授業を継続させるよう、それを中止することのないよう、そして新しい仲間たちが来たら、適当と判断する者たちに直ぐに日本語（学習）に専念させるよう要望する。というのは、授業がコレジオの他の仕事によって中断されるか、またはそのために彼らが言語（学習）に専念出来ないようなことになったら、彼らは確固とした進路を失い、そこから彼らが、果たしてこの（マカオ）布教やあの（日本）布教に携わりたいと上長たちに頼むか、それともインドに帰らせてほしいとせがむ気を起こすか、私には分からない。もしも或る布教のための授業が定着していれば、彼らはそこに赴くであろう、そしてそれ（その布教）を見棄てるのを恥じることであろう」と。なおここにおいても、関心はもっぱらヨーロッパ人宣教師に対する教育であることがわかる。<sup>(51)</sup>

1624年1月作成日本管区第三カタログにも、マカオ・コレジオには日本語と中国語の教師が一人ずついることが記されている。<sup>(52)</sup> 1624年当時、その後司祭になる2人の日本人イルマンがコレジオに滞在していたが、彼らと日本語の授業の間にどのような関係があったのか、この点も興味深いところである。

マカオ・コレジオにおいて、日本語学習者に多くの便宜を与えたと考えられる『大文典』、『小文典』はその後多くの学者に引用されている。ドミニカ会士のデアイカオリヤダは1632年にローマで75頁の『日本文典』を出版したが、序言の中でロドリゲスの文典を参考にしたと述べている。さらに1738年にはメキシコで簡易な『日本文典』が出版された。著者はスペイン人宣教師のヤンガルンで、序言ではロドリゲスの名前は記されていないが、内容はロドリゲス著『日本大文典』の第二、第三の部分は類似点が極めて多い。<sup>(53)</sup>

## 5. 結び

本稿においてマカオ・コレジオに所蔵されていた日本語学習書籍について様々な視点から考察した。特に『日葡辞書』と『日本大文典』は、当時ではかなり高いレベルのもので、多くの司祭、宣教師の研究成果の集大成であり、日本人イルマンとの協同作業の成果であったことが判明した。その発刊の大きな契機となった活字印刷機の導入は、その意義は極めて大きいと言えよう。また両者ともイエズス会による日本布教がその頂点を迎えた1600年代初頭に発刊されており、宣教師の布教活動に大きな役割を果たしたと考えられる。以下、3種類についてそれぞれ総括を試みる。

まず『日葡辞書』であるが、収録語彙の数32293語は当時同類の辞書の中では、まさに最高のレベルに達していたと言っても過言ではない。しかも話し言葉中心で、また方言にも配慮し、その方言では布教の重点であった九州地方の方言を中心に取り扱っていた。更に宣教師が避けねばならない卑語や女性語も収録されていた。仏法語については布教の際の最大の関心事であったのでその収録はむしろ自然であろう。説教や告解を要務とする宣教師にとって重要な存在であった。

つぎは『日本大文典』であるが、日本語の文法現象をラテン的と日本的と

の二元的立場に立って紹介した点は、その意義は極めて大きい。その二元的立場に立つことにより理解を深めた、敬語表現や待遇表現の紹介は、日本語の敬語学習においては不可欠の内容であろう。各階層の人々に布教をしていく宣教師にとっては、敬語の習得は必要不可欠のものであった。更に書状の礼法、人名論、計数論等、宣教師に対し言語以外に多方面にわたる有益な情報を提供している。なお九州方言の発音法にも触れている点からは、『日葡辞書』が九州方言を多数収録しているのと共通の関心事が見えてくる。

つぎは『舞の本』についてである。今日伝存していないので、内容に関しては研究者の間で見解が分かれているが、幸若舞などの日本古来の舞の詞の集大成という立場に立つと、イエズス会の日本理解はかなり深いと言える。宣教師と日本の上流階級との対話に備えていたのであろうが、宣教師の日本語習得目標の高さも伺える。

1620年マカオで発刊された『日本小文典』の存在は極めて興味深い。発刊当時は、コレジオでの教育内容に変化が生じた頃、即ち日本人司祭の養成からヨーロッパ人宣教師の育成へと変化し、日本語学習のクラスが開設された頃である。従って、『日本小文典』は『日本大文典』を簡略化し、初級学習者用に改編されたものである。日本を目指すヨーロッパ人宣教師にとって適切な学習書籍となったはずである。『日本小文典』を初級者用とすれば『日本大文典』は中級・高級者用ということになる。発刊後、同コレジオに所蔵されたと考えても不思議ではない。

なお『日本小文典』で提唱している日本語教授法の中に、日本語教師について学ぶことを提起している。そこでどんな人物が日本語教師についたのか大変に興味ある点であるが、当時は日本から逃れてきたキリスト教徒が沢山おり、かつラテン語を理解しているイルマン等もいたので、日本人の教師が教えていた可能性も十分考えられる。

マカオ・コレジオでは1624年の時点で、日本語学習のクラスがまだ開設

されていた。その後、そのクラスがどうなったのかは不明であるが、徳川幕府が1637年に鎖国政策を実施して以降は、日本潜入が困難となり、クラスの存在意義が小さくなっていったことであろう。しかしながら、優れた日本語学習書籍は依然として存在した。その業績がその後、どのような影響をもたらしたのかについては、今後の研究課題としていきたい。

## 注

- (1) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』八木書店 2001年6月 512 - 537 頁
- (2) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』前掲 511 頁
- (3) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』前掲 519 - 536 頁
- (4) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』前掲 516 頁
- (5) 『新カトリック大事典』研究社 1998年1月 432 頁
- (6) 拙著「16, 17世紀における日本人司祭養成をめぐる日本・マカオの交流—コレジオを中心として—」『創大中国論集』第18号 2015年3月 22 頁
- (7) 五野井隆史『キリシタンの文化』吉川弘文館 2012年7月 180 頁
- (8) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 183 頁
- (9) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 171 頁
- (10) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 181 - 182 頁
- (11) 『新カトリック大事典』前掲 431 頁
- (12) 土井忠生、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』岩波書店 1995年11月「解題」9 頁
- (13) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 186 - 187 頁
- (14) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 187 頁
- (15) 土井忠生、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』前掲「序言」4 頁
- (16) 土井忠生、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』前掲「冒頭」
- (17) 土井忠生、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』前掲「解題」11 - 12 頁
- (18) 土井忠生、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』前掲「解題」12 頁
- (19) 土井忠生、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』前掲「解題」12 - 13 頁
- (20) 土井忠生、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』前掲「補説」859 頁
- (21) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』前掲 526 頁

- (22) 宇野有介「1560年代前半におけるイエズス会宣教師の活動について」「二松学舎大学人文論叢」75巻2005年10月107頁
- (23) 刘小珊《明中后期中日葡外交使者陆若汉研究》暨南大学中国古代史2006年博士論文270頁
- (24) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲190頁
- (25) 馬場良二『Joao Rodrigues「ARTE GRANDE」の成立と分析』風間書房2015年1月28頁
- (26) 青木志穂子「ジョアン・ロドリゲスの日本語敬語観」187頁 <http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/> (2016. 1.7 閲覧)
- (27) マヌエラ・アルヴェレス、ジョゼ・アルヴェレス『ポルトガル日本交流史』彩流社1992年5月49 - 50頁、刘小珊《明中后期中日葡外交使者陆若汉研究》前掲272頁
- (28) 宇野有介「イエズス会宣教師達と日本語」「二松学舎大学人文論叢」74巻2005年3月159 - 160頁
- (29) 宇野有介「イエズス会宣教師達と日本語」前掲156 - 157頁
- (30) 清水孝子「豊後(大分)におけるルイス・アルメイダ」92頁 [http://www.caj1971.com/~kyushu/kcc\\_13\\_08](http://www.caj1971.com/~kyushu/kcc_13_08) (2016. 1.7 閲覧)
- (31) 宇野有介「イエズス会宣教師達と日本語」前掲156頁
- (32) 宇野有介「イエズス会宣教師達と日本語」前掲154 - 155頁
- (33) 宇野有介「イエズス会宣教師達と日本語」前掲148頁
- (34) 宇野有介「1560年代前半におけるイエズス会宣教師の活動について」前掲107 - 108頁、刘小珊《明中后期中日葡外交使者陆若汉研究》前掲260頁
- (35) 宇野有介「1560年代前半におけるイエズス会宣教師の活動について」前掲109頁、刘小珊《明中后期中日葡外交使者陆若汉研究》前掲260頁
- (36) 宇野有介「1560年代前半におけるイエズス会宣教師の活動について」前掲99頁
- (37) 宇野有介「1565年～1566年におけるイエズス会宣教師の活動について」「二松学舎大学人文論叢」77巻2006年10月174頁、176頁
- (38) 宇野有介「1565年～1566年におけるイエズス会宣教師の活動について」前掲169 - 170頁
- (39) 宇野有介「1565年～1566年におけるイエズス会宣教師の活動について」前掲168頁
- (40) 成田勝「宣教師の日本語理解力について」「大分懸地方史」(102) 大分県地

方史研究会 1981年6月20頁 <http://bud.beppu-u.ac.jp/xoops/modules/xoonips/download.php?id=kc10202> (2016. 1.7 閲覧)

- (41) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 183 頁
- (42) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 185 - 186 頁
- (43) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』前掲 435 頁
- (44) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』前掲 435 - 436 頁
- (45) 拙著「16, 17 世紀における日本人司祭養成をめぐる日本・マカオの交流—コレジオを中心として—」前掲 24 頁
- (46) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』前掲 435 頁
- (47) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』前掲 436 頁
- (48) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』前掲 436 頁、刘小珊《明中后期中日葡外交使者陆若汉研究》前掲 273 - 274 頁
- (49) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』前掲 436 頁
- (50) 刘小珊《明中后期中日葡外交使者陆若汉研究》前掲 276 - 277 頁
- (51) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』前掲 436 - 467 頁
- (52) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』前掲 467 頁
- (53) 刘小珊《明中后期中日葡外交使者陆若汉研究》前掲 281 - 282 頁



執筆者紹介（執筆順）

高 橋

強

創価大学文学部教授

（編集委員）

川 崎 高 志

創大中国論集

第 19 号

---

2016 年 3 月 31 日発行

発行者 創価大学文学部人間学科中国語・中国社会文化専修  
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236  
電話 042-691-2211 (代)

印刷所 株式会社 紀伊國屋書店

---



---

# Soka University Bulletin of Chinese Studies

---

**No. 19 March 2016**

## **CONTENTS**

A study of some books for learning Japanese Language

In Macau Colégio Collection ..... Tsuyoshi TAKAHASHI

**Chinese Studies Course  
Department of Humanities  
Faculty of Letters  
Soka University**